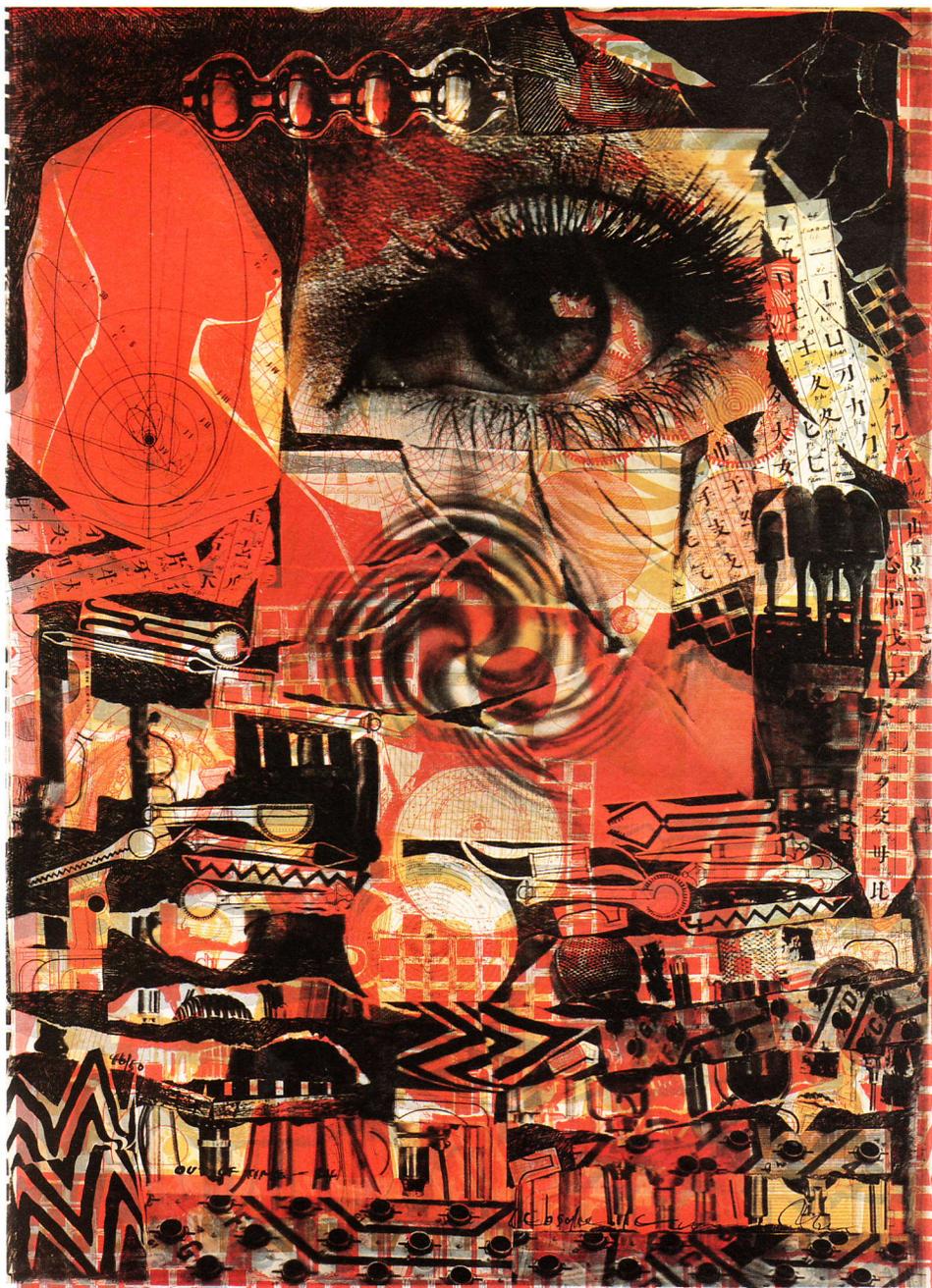


特別展

# 版画の1970年代



木村光佑 OUT OF TIME-24 1970 シルクスクリーン

1996年6月11日[火]—7月21日[日]

【開館時間】午前9時—午後5時(入館は4時30分まで)

【休館日】6月17日(月)、24日(月)、7月1日(月)、8日(月)、14日(日)、15日(月)

【入館料】一般200(160)円/小・中学生100(80)円 ※( )内は20名以上の団体料金

渋谷区立松濤美術館

〒150 東京都渋谷区松濤2-14-14 TEL.03-3465-9421  
井の頭線「神泉駅」下車徒歩5分、「渋谷駅」下車徒歩15分

# 版画の1970年代

1970年代におけるわが国の版画状況は、戦後のめまぐるしい変遷のなかでも特徴的な時期でした。単に多様な技法や表現が乱舞したというだけでなく、その後の方向をも示唆する大きな変化が認められます。本展は多くの作家が版画に目を向けていた、そんな「版画の1970年代」の展開を改めて見ようとする展覧会です。とは言い、70年代の10年間に限ってみても版画の表現は非常に多岐に亘り、その作家や作品の数は膨大なものです。ここでは、この時期の版画を網羅するのではなく70年代の“変化”とはどのようなものであったのか、それを物語る作品に焦点をあてました。

この時期、画家はもちろんデザイナーや彫刻家など様々なジャンルの作家が、積極的に版画を制作するようになり、版画にとって新たな意味が付加され変化するきっかけとなりました。たとえばデザイナーは版画を印刷物としてとらえ大量に頒布されることを望み、彫刻家は版画の平面に新しい世界を創造しました。また、モノタイプ(一点制作)の版画という一見矛盾する作品も登場します。一方で、既成の映像や私的な写真を取込み表現を展開する作品や、版画というジャンルがもつ意味や制作プロセスの構造を解き明かそうとする作品も現れました。そうした変化の要因は、シルクスクリーンや写真など時代の表現に呼応する技法が容易に用いることができるようになったことと概念的な美術や社会性をもった美術

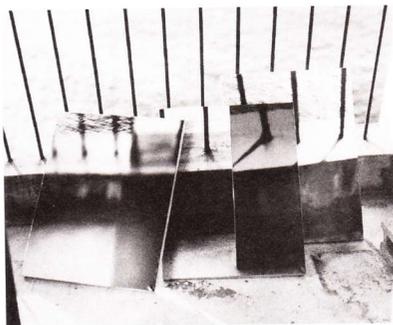
が大きな存在だったことによるのでしょう。

版をつかう版画といっても、その制作過程では“描く”という要素も多分にあり、それを根底におきながら版画は成り立っていました。しかし、この時期の版画は極端にその“描く”ことを省くようになりました。それに替わるのが、刻む・刷ることを行為として認識することと、映像のもつイメージを引用・記録することでした。そこでは、作品とおして何をしようとしているのか、または、何を見ようとしているのかが問われていたのです。「版画の方法」を突き詰めることで、逆に従来の意味での版画から遠ざかり変化をうみだしていったとも言えるでしょう。そうした傾向は現在の版画にも、さらには他のジャンルにも大きな影響を与えているのです。

本展では、1970年代に制作された、およそ40名の作家による版画作品を120点ほど展示します。この時期の版画の変化がどういふものであったのか、また何を生んだのかを展望するよい機会になることでしょう。

## この七つの文字

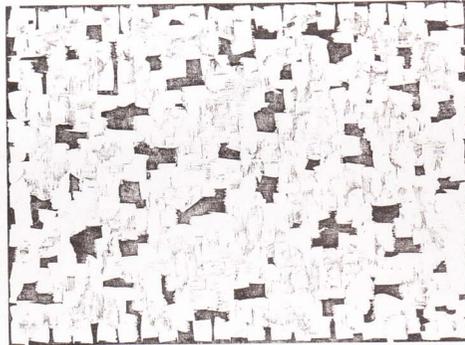
高松次郎 この七つの文字 1970  
セロックス



斎藤智 Untitled C 1976 シルクスクリーン



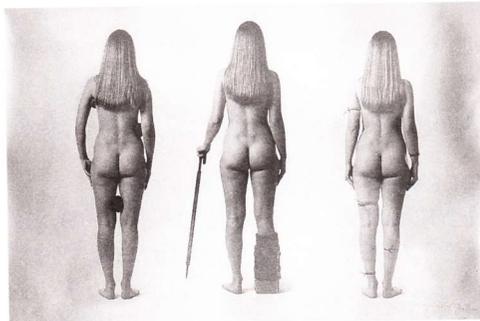
原口典之 無題 1972 シルクスクリーン



李禹煥 関係項B 1979 木版



吉村益信 群盲撫象 1972 シルクスクリーン



眞板雅文 人間と物質 1975 写真

## 講演会

6月29日(土) 午後2時～  
「消費社会のグラフィック」  
柏木博(武蔵野美術大学教授)

## 美術映画会

6月22日(土) 午後2時～3時  
「京都の魅力  
仙洞御所／京都御所」  
「京都の魅力 宮廷文化」

7月20日(土) 午後2時～3時  
「京都の魅力 東寺」  
「京都の魅力 平等院」

## 美術相談

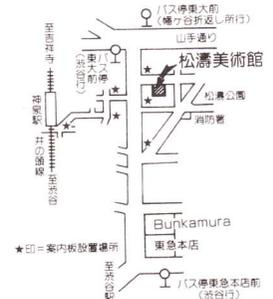
6月23日(日) 午後2時～4時  
講師＝佐久間公憲(油絵)  
松島靖(水彩)

7月7日(日) 午後2時～4時  
講師＝西嶋俊親(油絵)  
大和屋蔵(水彩)

## 渋谷区立松濤美術館

〒150 東京都渋谷区松濤2-14-14 TEL.03-3465-9421  
井の頭線「神泉駅」下車徒歩5分、「渋谷駅」下車徒歩15分

## 案内図



渋谷駅 下車徒歩15分 神泉駅 下車徒歩5分